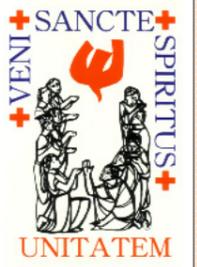


2022年5月15日 (第207号)
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yousei@takamatsu.catholic.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/



カトリック高松教区報

マザー・テレサの言葉

はじめのころ、わたしは人を回心させなければならぬと思っていました。
そうこうするうちに、私の使命は、愛することだと分かりました。

オソリオ四国へ

井の中の蛙大海を知らず

森 一幸



この度、桜町教会を担当させていただくことになりました。森一幸です。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

高松教区に来るまでは、千葉県の東端にある銚子教会を担当していました。銚子教会は小規模な教会で、信者の多くは外国籍の方です。フィリピン、ベトナム、韓国、インドネシアなど

復活祭後に着任された森神父、オソリオ神父です。よろしくお願ひいたします。

で、日本人は少数です。

神学生時代は規模の大きい教会での実習がほとんどで、神父になった最初の教会も同じでした。その後、銚子教会で初めて主任司祭という立場になりました。この銚子教会で、それまで培ってきた教会に対する固定観念が覆りました。タイトルにしました『井の中の蛙大海を知らず』を経験したのです。

レストランで働くと、リーダーである料理長がいて、材料を仕込む人もいます。各テーブルへ配膳するホールスタッフがいる。会計を担当する人もいます。かつて経験してきた教会のイメージですが、銚子教会ではワン・

オペレーションが中心です。来られる方も多国籍。日本人の好む料理を提供するだけでは通用しません。おかげでゼロからスタートするという経験をさせていただきました。ゼロからスタートというのは固定観念を捨て、どのようなレストランにするべきかを根本から考える、ということですね。

日本のカトリック教会のほとんどは小規模な教会だと思えます。小規模な教会が大海でしょう。それでも教会が存在すべき意義は何なのか。それは、自身自身が存在する意味に通じます。キリスト信者一人ひとりが教会を現わしているからです。

今回、高松教区への派遣という機会をいただきました。わたし自身が再び大海とするゼロからのスタートという機会です。

心の故郷・四国に帰って

アントニオ・オソリオ・フェルナンデス



どのような貢献ができるかを深めていながら歩めたらと願っています。改めまして、どうぞ、よろしくお願ひいたします。

高松教区の皆さん、はじめまして！また前から知り合っている皆様、お久しぶりです！アントニオ・オソリオ・フェルナンデス神父と申します。宜しくお願ひ申し上げます。私は、1961年にスペインで生まれ育ち、お導きを頂いて日本で司祭職に

与ることになりました。しばらくフランスで働いておりました。が、今回12年振りに日本に戻りました。これまでの歩みを少しご紹介し、私の自己紹介を致します。

1990年、初めて日本に来ました。1年間日本語の勉強の後、哲学と神学の勉強が始まりました。1999年に叙階の恵みに与り、1年間は新居浜教会で奉仕させて頂き、大分の小教区のお手伝いに時々伺う中で縁あってそのまま宮崎の小教区と幼稚園で6年間働かせて頂くことになりました。そして、大分の玖珠の小教区と幼稚園で2年間働きました。その後、フランスに派遣されて、神学院の副院長と小教区の担当をいたしました。神学院での務めを通して神学生達との関わりを頂き、小教区に

おいては、他国にルーツのある方々との出会いを頂き彼らの信仰に触れました。フランスでの奉仕も本当には豊かな体験となりましたが、いつも心の内では「日本に戻りたい」と思っていました。これからの人生は、今振り返ると、私の計画ではありませんでした。全ては、神様の導きだったと思えます。この度、願ひが聞き届けられ、心の故郷である四国に帰って参りました。本当に心から喜んでおります。高山神父様からバトンを受け、丸亀・善通寺の小教区と幼稚園を担当させていただきますことになりました。皆さんと一緒に信仰の道を歩みたいと思ひます。よろしくお願ひ申し上げます。いつも神様の心かまに進めますように！

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちに大きな変化をもたらしました。最近、私は総合病院を受診しました。そこで見慣れた光景ですが、深く考えさせられることに出会いました。それは、案内される設定に従って、老若男女例外なく、感染防止対策を厳格に遵守する光景です。これは、病院だからではなく、今やどこでも見かけられる光景です。

私たちの日常生活にコロナ禍が課題になって2年余りにすぎません。しかし、生活は大きく変わりました。私が実感した病院での光景は、いのちを守るための行動です。一人ひとりが自分のいのちを守るための行動です。そして、自分のいのちを守るためには、他人のいのちを尊重しなくてはならないことを認識した行動です。他人から指押されなくても、日常的に実践できる行動です。

宇和島教会 百周年記念に寄せて

宇和島教会百周年については、3月27日のカトリック新聞紙上でも動画配信を紹介していますが、本紙前号で案内した宇和島教会からの寄稿です。

豊かな実りの時を迎えたい

宇和島教会宣教司牧評議会

議長 堀内伊作

耕した人、茨を刈った人、水を遣り続けた人々への尽きせぬ感謝を胸に

2021年11月20日、カトリック宇和島教会百周年記念ミサが高松教区諏訪榮治郎司教およびドミニコ会司祭団・申繁時宇和島教会担当司祭の共同司式のもと厳かに挙行されました。宇和島市は四国西南部に位置する、人口7万余



末から19世紀リ外国宣の真珠養殖と漁業、柑橘栽培を生業とする小都市ですが、19世紀末からバ

いよう重荷を取り除いて下さった人、そして思いが枯れてしまわぬよう絶えず水を遣り続けた人々の熱心さがあって、今日も宇和島の地で主の良き知らせが述べ伝えられていきます。百年の間、この働きを祝福して下さった主の計らいに心から感謝し、豊かな実りの時を迎えたいと願っています。

100周年の恵みに浴して

宇和島教会典礼担当

後藤敏彦

今年まで17年間、宇和島教会の典礼に奉仕させて頂いてきたこと、百周年記念行事に出会えたことは感謝です。折しも、コロナ禍の多忙さで不在がちな議長や司祭の心配に寄り添うことは、恩返しに気持ちで奉仕でした。申神父が大阪

教区から着任され、百周年の準備は大変ご苦労をされました。細々と信者さんの代わりにミサの式次第【記念ミサ典礼については八幡濱教会・清水裕子議長に全面的に協力と尽力して頂けたこと事

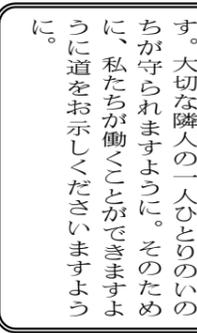


たのは、キリストとともに共同体を感じる時間でした。私は、74歳になりますが、現在も名古屋教区緑ヶ丘教会に所属しています。老後の田舎暮らしを描いていたので、この宇和島教会の素敵な姿にひかれ、宇和島市郊外の農村に居住して、晴耕雨読の生活を営んでいます。宇和島教会を1時間程かかりますが、四季の自然の移ろいがあり心安らぐ時間です。早期退職を機に移住したので、しばらくは退職前に帰天した妻の骨壺を支える生活でしたが、孤独も感じました。ハーブを育てて信者の

今年まで17年間、宇和島教会の典礼に奉仕させて頂いてきたこと、百周年記念行事に出会えたことは感謝です。折しも、コロナ禍の多忙さで不在がちな議長や司祭の心配に寄り添うことは、恩返しに気持ちで奉仕でした。申神父が大阪



今年まで17年間、宇和島教会の典礼に奉仕させて頂いてきたこと、百周年記念行事に出会えたことは感謝です。折しも、コロナ禍の多忙さで不在がちな議長や司祭の心配に寄り添うことは、恩返しに気持ちで奉仕でした。申神父が大阪



100周年記念ミサ動画配信

はばたき

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちに大きな変化をもたらしました。最近、私は総合病院を受診しました。そこで見慣れた光景ですが、深く考えさせられることに出会いました。それは、案内される設定に従って、老若男女例外なく、感染防止対策を厳格に遵守する光景です。これは、病院だからではなく、今やどこでも見かけられる光景です。

私たちの日常生活にコロナ禍が課題になって2年余りにすぎません。しかし、生活は大きく変わりました。私が実感した病院での光景は、いのちを守るための行動です。一人ひとりが自分のいのちを守るための行動です。そして、自分のいのちを守るためには、他人のいのちを尊重しなくてはならないことを認識した行動です。他人から指押されなくても、日常的に実践できる行動です。

地区・ブロックの話題

愛媛地区

西条教会の新しいスタートにあたり

西条教会は、教会建築後60年が経ち老朽化が進んだため、名残惜しいですが苦業を共に歩んでくれた教会の取り壊しを決意し21年の10月から新しい聖堂の建築を進めてまいりました。このたび、新しい教会が完成し、3月20日に諏訪司教様と小山助祭様に西条教会に来ていただくことができ、諏訪司教様に祝別をしていただきました。コロナ禍でもあり祝別のあとのパーティは開催できませんでしたが、天候にも恵まれて司教様に祝別していただくことが出来て最高の一日となりました。



新しい西条教会

新しい教会は、倉庫として使用していた信徒会館の1階部分



これまでの西条教会 (左) 3月20日、諏訪司教様に新しい教会を祝別していただきました。

新しくなりましたが、聖堂に入ると新旧が混じりあった懐かしい感じがする教会とすることができました。また、新しい教会は、前よりも天井が低くなり、少し狭くなったおかげで、フェルナンド神父様との距離がぐっと近くなり、今まで以上に神父様のお話を身近に感じられるようになりました。なお、これまで教会の建っていた跡地は、駐車場として使用することになり、教会に車を駐車することに、そういえば、ここに聖堂が、ここに祭壇が・・・あったんだなと思いつきながら車を止めているような状況です。西条教会は、主日のミサに参

加する人数は15人前後でこじんまりとした多様性に富んだ教会です。近年信者の国籍の割合も大きく変化してきており、新しい教会のスタートにあたり今まで以上に多様性を意識した教会の運営をしていかないとけないと感じています。現状は、コロナ禍でもあり、いろいろな行事、イベントを制限しないといけない状況ですが、私たちは新しい教会でフェルナンド神父様と一緒に日本人・外国人全員参加の多様性に富んだ楽しい教会運営をしていきたいと思っています。

「聖霊の統唱」を唱えてから本日の福音書を音読し、ドラマ仕立てになっている動画を見ます。その後注解書を輪読し、内容を深めていきます。全部を読み終わったら、順番に感想を述べます。最後に「主の祈り神様パージョン」を唱え終了となります。参加者は毎回7〜8人ほどです。夜に開催され自宅から参加できるので仕事をしている方でも参加しやすくなっています。

Zoomで 聖書の分かち合い

野口佳津江

昨年の9月21日から、ブラザー八木による聖書の分かち合いが始まりました。隔週火曜日19時30分〜21時に行われています。「ルカによる福音書」を初めから読んでいます。

Web会議サービスアプリ「Zoom」を使用して行われています。Zoomとは、パソコンやスマートフォンからインターネットを介して会議をすることのできるサービスです。コロナ下において広く使われるようになり、パソコンやスマートフォンに内蔵のカメラと

マイクから画像と音声を持続送受信しながら複数の場所から同時に、インターネット上で行われる分かち合いの会に参加ができます。

パソコンもしくはスマートフォンをWiFiに接続してからミーティングルームにアクセスします。アクセスのためのコードは事前にメールで送られてきており、ワンクリックで簡単にアクセスできます。会議中の画面には、参加者全員の顔が表示され、発言者が自動的に大きく映るようになっていきます。

「聖書の勉強会」には初参加で、解説してもらいながら読んで行くのが非常にわかりやすく感じました。また、ブラザーのお話や、参加者の方の感想を聞き、自分では気づかない視点からの見方に気づくことができました。一方で自分の話を受け止めるのが難しいです。

これから聖書の人物のどんな行動を知り、その思いに迫れるか。またこの分かち合いを通して自分かどのように変容しているのか、楽しみにしながら続けて参加したいと思います。

お詫びと訂正

高松教区報206号4ページの「宇和島教会創立100周年記念ミサ」記事の中に「ヨゼフ呉文成神父」としているのは誤りで、正しくは「ヨゼフ郷文成神父」です。お詫びして訂正いたします。

シノドスの分かち合い

高田美実

この度、教皇さまの呼びかけで2021年の秋から2023年の秋に向けて世界中の教会がシノドスの歩みを始めました。シノドスとは「ともに歩む」という意味なので、シノドスの教会になるために、すべての信徒がともに歩みながらどんな教会であらばいいのか、どのように宣教すればいいのか、御父が現代において私たちに求めておられることを見極めるために、みんなで祈りながら、分かち合いながら新しい流れを作っていくという招きです。

徳島教会はシノドスの準備として先ず、「第16回シノドスに向けて」の諏訪司教様の動画を拝見し、「10の質問」を配布しました。その後、待降節の黙想会としてブラザー八木からシノドスに向けての準備についてお話しいただきました。分かち合いは2つのグループに分かれて3回開かれ(約18名参加)、英語のグループは2回行われ(9名参加)、ベトナムグループは都合で出来ませんでした。分かち合いに参加できなかった方には四旬節の手紙の中で、「10の質問」の他、諏訪司教様のメッセージの動画を紹介し郵送しました。分かち合いはミサの参加者の2割程度でした。

たくさんの貴重なご意見やご提案をいただきましたが、シノドスは一人ひとりの信仰の振り返り、教会の在り方の見直しを求めているので、どんな困難な

問題があっても教会はイエス様の福音によって乗り越えていく他はないと思われまます。福音とは何かに立ち返り、2000年前にイエス様の伝えられた福音に向かい、学び、悩み、祈りながらそこに向かって巡礼の旅をしていく。それが信仰生活ではないでしょうか。今回私たちは改めてその入り口に立たせていただいたという思いがしています。

最後に分かち合いの中で特に心に響いたことは、「教会は人を魅了することで成長する」という教皇さまのお言葉でした。日本でも一人の聖人が出ることでよって計り知れない恵みがいただけることでしょう。そのため一人ひとりの信徒の生き方が問われています。

この度、東讃ブロックに異動となりました。丸亀・善通寺の小教区の皆様、幼稚園の皆様、本当にお世話になりました。コロナ禍と共に着任したのが昨日のことのようです。かつてないパンデミックの状況下、社会全体が静まり返っていました。教会や幼稚園も、着任後は通常化を待たねばなりません。そのような中でも、皆様が色々な配慮を下さり、交流が始まりました。毎朝、祈りとミサを1人で終え、園庭に向いて走り回り、幼稚園ではいつも元気を頂きました。また、教会で1人待機する私を気遣って訪問や電話連絡下さる小教区の方々や町内の方が何人もお

拝見し、「10の質問」を配布しました。その後、待降節の黙想会としてブラザー八木からシノドスに向けての準備についてお話しいただきました。分かち合いは2つのグループに分かれて3回開かれ(約18名参加)、英語のグループは2回行われ(9名参加)、ベトナムグループは都合で出来ませんでした。分かち合いに参加できなかった方には四旬節の手紙の中で、「10の質問」の他、諏訪司教様のメッセージの動画を紹介し郵送しました。分かち合いはミサの参加者の2割程度でした。

たくさんの貴重なご意見やご提案をいただきましたが、シノドスは一人ひとりの信仰の振り返り、教会の在り方の見直しを求めているので、どんな困難な

問題があっても教会はイエス様の福音によって乗り越えていく他はないと思われまます。福音とは何かに立ち返り、2000年前にイエス様の伝えられた福音に向かい、学び、悩み、祈りながらそこに向かって巡礼の旅をしていく。それが信仰生活ではないでしょうか。今回私たちは改めてその入り口に立たせていただいたという思いがしています。

最後に分かち合いの中で特に心に響いたことは、「教会は人を魅了することで成長する」という教皇さまのお言葉でした。日本でも一人の聖人が出ることでよって計り知れない恵みがいただけることでしょう。そのため一人ひとりの信徒の生き方が問われています。

絆に支えられた2年間 高山 徹



悔いが残っておりません。「ソーシャルディスタンス」を取ることが大前提で、ゆっくり交流するのも難しくなりました。しかしながら、次のようなご助言も頂きました。「神様との関係をしっかりと保てば、人の絆もきつと途切れることはない」とは、今後ともテーマになると思います。2年間、霊的な生活を自分自身が深めたとは言いがたいですが、沢山の恵みや絆を私に頂いたことは間違いありません。丸亀・善通寺の小教区・幼稚園の皆様、そして西讃ブロックの皆様、ありがとうございました！アトントンオオソリオ神父様にバトンタッチいたします。東讃ブロックの皆様、特に小豆島教会・番町教会の皆様、高松聖母幼稚園・長尾聖母幼稚園の皆様、よろしくお願ひ申し上げます。

れました。先の見えない状況下でも、沢山の励ましを頂きました。その後も感染拡大は、一時は終息の兆しを見せつつも継続し続けておられます。ある程度活動が可能になりながら、病者訪問や信仰講座の実施等、小教区の活動を活発に出すことが出来ませんでした。コロナ禍が主たる要因ではあります。高松聖母幼稚園・番町教会の皆様、高松聖母幼稚園・長尾聖母幼稚園の皆様、よろしくお願ひ申し上げます。